

ちいさな証

ふくしま、大震災から2年

阿部恩 (めぐみ)

二本松バプテスト教会



東日本大震災から2年が経ち、ここ福島市では、ほぼ震災前の生活に戻りつつあります。新たに加わったのは放射線とのつきあい。福島市は今でも事故前の基準である年間1ミリシーベルトを超える地域ですので、私の町の公民館には食品の放射性物質分析機器がおかれ、庭や自家菜園で採

れたものに含まれる放射性物質の量がはかれるようになっています。また町会でも線量計を買って、町民に貸出しすることができるようになり、学校や公民館などから始まった除染も、今は住宅にすすみ、我が家も来年度には除染が入る予定です。公園では除染によって土が削られたため、根がむきだしになり、その後の強風で40年近く育った大きな松や杉の木が何本も倒れました。放射線の影響はこんなところにも及んでいます。

あまりにも大きな揺れに、死ぬかもしれない、と覚悟をした経験は、その後の私の生き方に影響を与えることになりました。人は死ぬとき何一つ持っていくことはできない、と身をもって経験したのです。それは非常持ち出し袋を作っているときでした。お気に入りの服や靴、今まであれがほしいこれが欲しいと買って来たものが、非常時に持ち出せないばかりか、もし持ち出せたとしても役に立たないということが分かったのです。ヒールがあったり指先が出るサンダルなど、非常時には危険なだけです。いかに今まで「欲しがりすぎている」ということに気づいたのです。

また、「死を覚悟した」後、命が地上に残されていることは、まだやるべきことがあるということだと思いました。現在もそうですが勤務先は災害拠点病院である福島県立医科大学です。千年に一度といわれる大地震のとき、ここに職を与られているということは偶然ではないと思いました。ここが神から与えられている地、預けられているタラントだと思いました。横浜に住む弟からも、さらには牧師からも、避難を勧められましたが、ここにとどまるべきだという思いで毎日仕事に通いました。ガソリンがなかったり、車も流されたりして多くの人たちが避難できずにおり、なぜ死んでも天国にいける私が先に逃げることができようか、という思いもあったからです。



勤務地；福島県立医大、震災時、駐車場は自衛隊のヘリポートとして使われ負傷者で埋まっていた。

私は主の前に正しく生きているか。これが震災後の私の姿勢です。放射線についているんな人がいるんなことを言います。自民党は過去に原発推進してきたにもかかわらず、こんな事故があっても自民党が与党になり、再稼働や原発輸出など、理不尽なことばかりです。

しかし、私が期待すべきは主のみであること、さまざまな不満は主の前にそのまま持っていくこと。人はどうでもよい、私は、主の前に正しく生きること、これが私の姿勢であり毎日の目標です。

今、目の前で起きていることは、神から与えられたものである、とせめてクリスチャンはしっかりと認識する必要があると思っています。現実には抵抗すること（反原発・脱原発は別として）は本当に必要なのかと考えています。与えられた中でできるだけのことをします。我が家も早期に芝生をはがしたり、窓辺に水を入れたペットボトルを置いたり、こまめに拭き掃除をしたりと、線量が下がるようにできるだけのことをしました。起きるかどうかわからない

健康被害について心配し続けるよりも、実際に津波で近しい人を亡くしている人のことも考えてはどうかと思うのです。神から与えられた現実、と受け止めない大人を見ている子供たちはどうやっていくのかとってしまうのです。

ご存じの通り、今年のNHK大河ドラマは福島県が舞台、クリスチャン新島八重が主人公です。困難なこの時代に私たちクリスチャンがどう生きるか、どう神の栄光

をあらわすか、と問われているのは間違いないと思うのです。地震の揺れからも私を守ってくださった主は、放射能からも私を守ってくださる、と原発事故直後から確信しています。しかし、もし、放射能による健康影響が将来出たとしても、全て主の御手の内にあり、私の人生の全ての責任を主が負ってくださる、と信じています。

スイス教会の兄弟姉妹が、いつも日本のことを気にかけてくださり感謝しています。続けて、日本のクリスチャンが元気であるように、また日本の魂の救いのためにお祈りいただければ嬉しいです。

「主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。」

ホセア6：2

阿部恵姉は福島県立医科大学・災害医療総合学習センターに勤務されています。ドイツでの語学研修中やご旅行で、スイス教会に幾たびかおいでになり、お交わりさせていただきました。